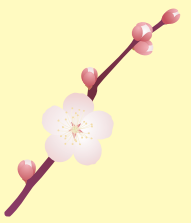
支部だより

【東京支部】

東京支部総会

第二十七回東京支部総会が平成二十二年十月三日（日）上野精養軒にて例年どおり、盛大に行われました。東京支部長小室　理氏のもと、参加者は約百二十名にものぼりました。原町からは、同窓会長、学校長、事務局長、恩師の先生方が出席しました。故郷や母校の現況を聞き、思い出を語り旧交を温め合う場となり、大盛況のうちに幕を閉じました。



あれから、六十一年

昭和二十四年、ぼくは原高三年生になった。この年から、普通科ができて、原女が移ってきて、名実ともに、男女共学の新制高校になった。その女学校が引越してきたときのことは、忘れられない大事件だった。今までなかったピアノ（アップライト）をリアカーにのせてやってきた。「嫁入のタンスみたい」とだれかが言った。ぼくらは息をつめて、静かに教室の窓から見ていた。実に賑やかな嫁入り行列だ。校舎に入ってくる女学生の高笑い声、静かな男たちとは対照的だった。

さて、この写真は、現在のぼくたちで、学年も異なるミニ・同窓会。広い東京にあって、年に何回か集まって母校の話に花を咲かせる。

青田　昭治（2回生）
川副（岡崎）圭子（3回生）
石川　俊信（3回生）
手塚　哲郎（2回生）
長谷川吉男（2回生）
長谷川勇男（8回生）

原高が駅伝全国大会に出場したときや、マラソンの今井君を迎えて、後楽園のドームホテルで激励会を開いて、原町からかけつけてきた現役の生徒さんと高らかに校歌を合唱し、人生最高の至福を謳歌したものである。

原女の引越しから六十一年、昨日のことのように、興奮しながら思い出す。

あの美少女軍団のひとりひとり、今はどこで、どうしておられるだろうか。

もう八十歳にならんとしている。そして、いま十七歳の青春を満喫しているみなさんが、あと六十年たったらと思うのも、同窓会の夢物語である。

原高よ永遠なれ！
ご健闘を祈る！

長谷川　吉男（第二回卒）

【原町支部】

二十二年度「原九会」に参加して

昨年の二月に、事務局長の濱野さんより、八月十四日（土）に、原九会を開催するので出席されたしとの葉書をいただきました。

現在、私は地域活動をさせて頂いておりますので、色々な行事をやり繰りし、還暦以来、十二年振りの参加でありました。

卒業後、五十三年が経過してしまい、光陰矢のごとしといいますが、まったく早いものです。「ホテルもりのゆ」に集まった面々に、名前も顔も思い出せない人、お会いして直ぐに分かった方など悲喜交々でございましたが、三年間共に学び遊んだ仲間と、酒を酌み交わし旧交を温めましたので、打ち解けるのにながい時間はかかりませんでした。こうして宴会は進みすぎてゆきました。大変楽しく盛り上がりました。

さて、私が今回の参加で特に感じたのは、恩師を含め二十一名という多くの物故者がおられたことです。クラス会に恩師のお姿が見えないのは誠に寂しく、残念でなりません。柔道の選手で立派な体格のあの人も亡くなっている。おとなしく寡黙だったあの人も。次々と目に浮かんできますが、心から哀悼の誠を捧げたいと思います。

小川町校舎が無くなって久しいのでしょうが、私は残念に思っております。帰省の折、小高（妻の実家）から鹿島（小生の実家）へは旧道を利用し、小川町を通ります。私の思い出が詰まった母校が見られないのはとても残念です。そして、もう少し下って、北新田は自転車通学をした懐かしい地名です。

毎年高校野球シーズンが来ると、昨日原高は勝ったかと新聞を隅から隅まで探しますが、県代表は遠いでしょうか。二十一世紀枠もありますから私たちの目の黒いうちに、一度、甲子園に出場してほしいと願っています。真っ先に応援に行きます。

地元で幹事を務めておられます方々本当にご苦労様です。次回も出席させて頂きますので、どうぞ宜しくお願い申しあげます。

葉折　勝利（第九回卒）

開催7度目の珊瑚会

私たち、原高12回卒業生は普通科男子2クラス、商業科女子3クラス、普通科2クラス合同の集まりです。昨年8月開催で7回目となりました。恩師を囲み80名の同期生は、想い出や近況を語り合いながら友情を温め合う楽しい時間を過ごしました。

私たちは、1年生の時に学校火災、2年生の時には、水害に遭いました。当時、復旧に寄せる地域の方々や先輩達の原高への熱き思い“学ぶ環境づくり”への努力を身近に感じてきました。

今日、生徒数の減少の中、同窓会運営に大変なご苦労をされている現況を知り、珊瑚会出席者の思いがひとつになって、原高の増々の発展を願い同窓会に基金を贈らせて頂きました。

石田　賢二（第十二回卒）

同窓会顧問
（故）杉　喜一氏
を偲んで

昨年十一月二十九日、杉さんの突然の訃報に接し驚き名状し難い思いでした。

杉さんとの出会いは原高合併後の校歌練習の時でした。私達三回生は小学入学当時から「男女七歳にして席を同じゅうすべからず」という時代でした。女生徒のみの学校から、棒を振りかざすバンカラぶりには恐れをなしたのが最初でした。

それが鈴木勝利校長先生宅を訪れては何くれと配慮されていたこと、また毎年大熊の梨畑にお誘いし樹下で鍋を囲んだこと等、写真が残されています。気配りや思い遣りの深い方でした。

同窓会の入会式や総会には必ず合併前の三校の校歌の発声を努めていました。

同窓会館の名称も彼の考案によるもので、私達の集い柏曜会から命名することになったのです。

昨年の梨の季節にも、星先生、茂垣先生を囲んで柏曜会を催したばかりでした。とてもお元気でしたのに…。

同級生一同
ご冥福をお祈り致します。

同窓会顧問　佐藤　ヒロ子

杉　喜一氏は、毎年、同窓会入会式に出席され、原町高校の前身である「相馬商業学校・原町実科高等女学校」の校歌をアカペラで披露し、新しく入会する卒業生を歓迎して下さいました。原町高校の体育館には、その大きく力強い歌声が響き渡り、出席者一同それに聴き入ったものでした。それも、もう今年から聴くことができなくなるのは、非常に淋しいことです。

原高にもタイガーマスク！

子どもたちの生活を応援しようとする善意のリレーのような「タイガーマスク」現象が、日本列島をにぎわせています。

実は、まったく同じような心温まる優しい手が、原町高校にも届いています。

昨年八月七日に恩師の先生方をお招きし、第七回「珊瑚会（原高12回卒の同期会／代表石田賢二氏・事務局佐々木昭夫氏）」の集いが行われました。

八十余名の参加により大いに旧交を深める中で、後輩のために基金を贈ろうということになり、十万円のご芳志を原高同窓会にお寄せ下さいました。

また、九月には、「原九会（代表岡和田高志氏・事務局濱野博充氏）」より三万円のご芳志をお寄せいただきました。

現在も原高生は、学習に、部活動に、ボランティアに、と高校時代を有意義なものにすべく精一杯力を尽くしています。

その後輩諸君を、物心両面から支援したいと願う同窓会ですが、残念ながら活動資金がたいへん限られています。

特に、原高生の学習活動の援助のために創立五十周年記念事業として設立された柏曜会館の、維持管理の費用捻出に苦心しています。

今回お寄せいただいたご芳志は、同窓会活動の一環として、後輩諸君の学習活動の支援のために活用させていただきます。

今後とも、原高生のための「タイガーマスク」の温かいご支援をお願いいたします。

同窓会体制強化に向けて

皆さんは、ご存知だろうか。

本校の同窓生は既に二万五千名を超え、地域屈指の大所帯の同窓会となっている。しかし、その活動費は、在校時に納める年間千円・計三千円の終身会費にそのほとんどを依存していることを。

少子化により学年六クラスとなった現在の原高では、後輩を支援するための同窓会活動が十分に展開できない。特に、竣工から二十年を超える柏曜会館の維持・修繕の費用を賄うことが難しくなっている。八十周年記念事業の財源にも不安が募る。

また、組織体制も、学年幹事が各学年をまとめることを中心として編成されてきたが、毎年の総会について新聞広告等でお知らせはしているものの、役員以外の一般会員は同窓会活動についてほとんど関わる機会がない。東京などの一部の支部を除けば、地域的なつながりも希薄で、結果として、本部の総会の参加者も例年少数である。

これらの問題の打開策として、地域に根ざした組織作りの必要性が昨年の総会でも話題になった。

そして、一月二十六日に、この件についての話合いが持たれ、次のような方向性が見えてきた。

「組織は小学校学区単位を基本とし、当面は地元南相馬市の組織確立に力を注ぎたい。

事業の柱として、小学校区分会により、同窓生に諸々のご理解・ご支援をお願いする。

そのために、各支部・各地区の代表も同窓会役員の一員となることが望ましい。」

もちろん、まだ、全くの試案の段階であり、正式には役員会・総会の審議を経なければならない。

しかし、いずれにしても、今年が同窓会の現状を一歩前進させる年になることが求められているのは確かなところだ。